



ホームステイの 思い出



伝える気持ち

大垣市立西中学校 1 年 海老 壱喜

僕がお世話になったホストファミリーは、エスペンシートさん一家でした。ホストフレンドのユーリーと、出発前からメールで連絡をしていました。ユーリーから写真も送ってもらい、日本のアニメが好きなことや、歴史に興味があることを教えてもらっていました。ホストファミリーは、お父さん、お母さん、妹でした。僕はずっとユーリーが一家のお父さんだと思っていました。しかし、ケーニギン・シャルロッテ高校で初めて会ったとき、ユーリーを見て驚きました。お父さんだと思っていたユーリーが高校 1 年生のお兄さんだったからです。かなり驚きながら、ホームステイが始まりました。



翌日はホストファミリーと過ごす 1 日でした。午前中はゲームをして過ごしました。任天堂の Switch や Wii があり、僕が持っているものより新しいものもありました。日本のゲームは世界に通用するのだと感じました。午後と一緒にプールで泳ぐことになりました。僕が想像していたプールとは違い、室内の飛び込み台があるプールに連れて行ってもらいました。また、僕の歓迎会をしてくれました。ホストファミリーだけでなく、お父さんやお母さんの友達もやってきて、料理を囲んで楽しく過ごしました。僕が持って行ったインスタントラーメンはとても好評で、特にユーリーは大声を出して喜んでいました。



ホストフレンドのユーリーは、日本語の勉強をしており、日本に興味をもっていました。剣道をやっていて、腕前も州で 3 位に入るほどです。そんなユーリーは、僕に英語とドイツ語を教えてくださいました。一緒にショッピングに行ったり、テレビゲームをしたり、電車やバスで移動したり、一生懸命、生活の中で英語で話しかけてくれました。初めはドキドキしていましたが、すぐに打ち解け、ユーリーやホストファミリーの話す英語が聞き取れるようになりました。自分が伝えたいと思うことは、ジェスチャーも交えて話すようにしました。うまく話せなくても「伝えたい」という気持ちがあれば伝わります。一つ屋根の下で生活し、自分が伝えたいことを言葉にしたり、行動にすることで、互いのことを知り、スムーズにコミュニケーションが図れるようになりました。言葉がわかるということは大切ではあるけれど、互いを理解しようとしたり、心を通わせたりすることがとても大切だと、このホームステイを通じて学びました。



ホストファミリーとは、帰ってきてからもメールをしています。先日は僕の誕生日にメールが届き、とても驚きましたが、うれしかったです。このご縁を大切にしたいと思います。

この 5 日間はとても短く感じました。日本に帰ってきて、「ホームシックにならなかったか」と聞かれましたが、不思議なほどなかったです。それだけ楽しく、このホームス

テイは、僕の人生の中で宝物になりました。そして、新たな目標を見つけるきっかけになりました。

この研修で学んだことを大切に、勉強や部活動、中学校の活動に励みたいです。

ホストファミリーとの特別な一週間

大垣市立北中学校2年 河瀬 真由

私のホストファミリーは4人家族でした。お父さんはアルフ（Alf）、お母さんはバーバラ（Barbara）、弟はヨアー（Joar）といいます。そして、私のホストフレンドはイルワ（Ylva）です。イルワはとても優しく、上手に英語を話せなかった私を支えてくれました。そのおかげで、イルワの家族やその友人と沢山話せるようになりました。

イルワの家はシュツットガルトの中心地から遠くはないですが、山の奥の方にありました。対面式の後、家に向かう途中で山の中に入っていました。どこに連れていかれるか不安でしたが、それに加えて、お母さんが「昨日、ここで鹿に遭遇したんだよ」と言われたので、家に帰る道中がとても怖い時間になりました。

しかし、イルワの家は、広い庭がある家で、庭にはトランポリンやバーベキュー場、ウサギ小屋があります。ウサギを2匹飼っていて、私は毎日イルワとウサギに餌をあげました。庭でバーベキューをして、ドイツのソーセージが大きくてびっくりしました。

研修2日目は、ホストファミリーと過ごす日でした。私達は、渡部さんと彼女のホストフレンドのナタリー（Natalie）、ナタリーの友達と一緒にテレビ塔、歴史博物館、フィッシュマーケットに行きました。テレビ塔はとても高く、シュツットガルトのシンボルのような存在です。歴史博物館は古いお城の内部を改装しているので、外観から街の歴史を感じました。フィッシュマーケットは魚以外にもスパイスやお菓子など色々な屋台が並んでいて、日本のお祭りのようでした。イルワは魚のサンドイッチを、私はブドウのまわりにチョコレートがコーティングしてあるお菓子を食べました。とても美味しかったです。

その夜、日本からのお土産を渡しました。扇子や和柄の鏡などを持っていきましたが、寿司マグネットと柚子胡椒や山椒のパスタソースが特に喜ばれました。

研修4日目は、ノイシュヴァンシュタイン城のツアーの帰りにイルワの学校の夏祭りに行きました。イルワは、ヴァーゲンブルク高校に通っています。この学校は約150年前創立の学校だそうです。ステージの上では、生徒が中心となり、お祭りを進めていました。オークションやショーをしてみんなを楽しませていました。とても面白かったです。

一週間はすぐに終わり、ホストファミリーと別れる時はとても悲しく、イルワも「もう一週間、延びない」と言ってくれました。しかし、再会を約束し、別れを告げました。私も、もっと一緒にいたかったです。ホストファミリーのおかげで多くのことを学ぶことができました。この貴重な経験はずっと忘れません。



思いであふれる 8 日間

大垣市立東中学校 2 年 河村 瑞乃

私は、ホストファミリーと 5 日間過ごして、英語で話すことが多かったけどコミュニケーションを大切にすることができました。また、大垣の良さや文化をお土産を通してや懇親会で伝えることができました。

ホームステイでは、ホストファミリーと過ごす時間を長くすることを心がけました。できるだけ、たくさん遊んだり挨拶するときはドイツ語でいってみたいなど自分なりに工夫をすることができました。私は、お土産で箸を渡したので箸の使い方を教えました。みんなは難しいと言いながら頑張ってくれました。他にも、お菓子の味など日本のことについて教えました。このように、お土産を通して会話をすることができました。また、ホストファミリーと過ごす日では、一緒に遊園地やショッピングモール、朝食の時にはパン屋に連れてってくれました。研修に行くときは、ホ

ストマザーが毎回りんごとお菓子を持たせてくれました。ホストファミリーとは、楽しい時間を過ごすことができました。また、こういう機会があったら今回以上にもっと話していきたいです。

ドイツの生活では、日本とは違い時差が 7 時間あります。なので、行った時も帰った時も時差ボケがありました。また、ドイツは 9 時ぐらいでも明るく長い時間ホストファミリーと過ごすこと

ができ、嬉しかったです。食事のときは、ホストマザーやファザーがピザやパンケーキを作ってくれました。とてもおいしかったです。ドイツの生活は日本と違うことがたくさんあって、困ったり教えてもらうときがあったけど行ったかいがあったと思いました。

研修では、はじめ心配だったので日本人と話す事が多かったけれど、ホストフレンドという意味を考えたならホストフレンドとたくさん話すことを心がけました。昼食のときでは、味が濃かったり初めて見る食べ物がたくさんあってびっくりしました。だけど、食べてみると意外においしかったです。学校見学のときでは、授業をうけてみて、実際に問題を解いたり始業式に参加し歌を歌ってみたりめずらしい体験をすることができました。

この研修を通して、団の目標にもある、国際色が豊かになるために人とのコミュニケーションの大切さやドイツ語の難しさ、ドイツの文化・生活を知ることができました。また、実際に五感を使って体験することで新しい発見や自分の知識が増えることなどを学ぶことができました。私は、ドイツにいて日本との違いを身をもって知ることができたのでよかったです。今後の生活にも生かしていきたいと思いました。これからも、ホストフレンドと連絡をとって行って研修以上に仲良くなっていきたいです。



ホストファミリーと過ごした時間

大垣市立東中学校2年 木曾 媛香

私を温かく迎えてくれたのは、ウルリッヒ家でした。

ホストフレンドのジェシカ、妹のジェニファー、お父さん、お母さんの4人家族です。初めて会った時から積極的に話しかけてくれたので、言葉が通じるかなという不安が一瞬で消えました。1日目の夜、私が大垣について紹介している時、真剣に耳を傾けてくれていて分からないことがあれば、「これは何？」と質問してくれました。私が説明をして分かってくれた時の明るい笑顔は今でも忘れられません。ジェシカの家は、音楽好きの一家です。お父さんはギター、ジェシカはドラム、そしてジェニファーはピアノができます。



ドラムは手足を使ってたたくので、両方で鳴らすのは足がとても疲れました。もう一つギターも教わりました。日本にいたときからギターに興味があったのでとてもワクワクしました。曲がひけるようになったので日本でも学びたいと思いました。

2日目には、別のホストフレンドたちと合流して遊園地へ行きました。



日本でもスリルのある乗り物に乗ったことがありましたが、未体験の恐さでした。あっという間の1日でした。

ウルリッヒ家でお世話になり、気がついたことが二つあります。一つ目は、ドイツの食事についてです。毎朝の朝食には、お母さんの手作りのラズベリーショコラケーキやアップルケーキなどができました。私は、それがとても大好きでしたが、デザートが朝食だという事に驚かされました。

私が普段食べる朝食は、ご飯とみそ汁などの和食です。私たちが食べる洋食のパンのようなものなののでしょうか？・・・そして、昼食はしっかり量を食べ、夕食は主食がなく出されたおかずを好きなだけ食べるというものでした。私の家では1日のうちで夕食を一番しっかりと食べます。そこから、日本とドイツの食事のとり方が大きく違うことが分かりました。

二つ目は、ゴミの分別についてです。翌日、何気なくジェシカと道路を歩いていると、大きなゴミ箱が目にとまりました。分別しているものが多く、いくつも置いてありました。日本でもゴミの分別をして資源を大切にしていますが、それ以上にドイツは力を入れているということが分かりました。

お別れの日の前日、私のひくギターにジェシカのドラムとジェニファーのピアノを合わせて両親の前で披露しました。毎晩の練習のかいもあり、とても喜んでもらえました。お世話になったのは5日間でしたが、ずいぶんと親しくなり、別れるのが淋しくなりました。

今回のドイツ・シュツットガルト市訪問における私の目標は、大垣の良さを広めると共に、英語を使って上手くコミュニケーションを取ることでした。実際に行ってみて、大垣についてたくさんの人に知ってもらえました。また、英語で自分の意思を伝えることができ、自分の自信にもつながりました。

私たちの場合では、音楽を通してより仲を深めることができました。そこから音楽も世界で愛されており、人と人をつなぐことができるという事を知りました。仲良くなったジェシカとは、今後もメールをしながら交流を続けていきたいです。

優しさを感じたホームステイ

大垣市立星和中学校 2年 桑原 光汰

僕が5日間お世話になったホストファミリーは4人家族でした。ホストフレンドは17歳のユーリアン、父はズヴォニミルさん、母はゴードーナさん、姉はメラニーさんでした。犬のミナと猫のミネールヴァもいて、とてもにぎやかな家族でした。

初めて会った時は、ユーリアンの髪が長くてすごく驚きました。もうひとつ驚いたことがあります。それはお父さんを「パパ」、お母さんを「ママ」と呼んでいたことです。日本では小さい子どもが使っているその言葉を、高校生のユーリアンが使っているのを聞き可愛らしく感じました。でも僕は親しみやすくいいなあと思いました。

うれしかったこともあります。それは日本語を使って僕に話してくれたことです。使える言葉を一生懸命並べて話すユーリアンの姿を見て、僕も知っている英語をたくさん使って会話をしたいと思いました。

夜寝る前には「疲れているから明日の朝はゆっくり寝ていていいよ」と気を遣ってくれたことも本当にうれしかったです。あたたかい言葉に安心して、ベッドに入ると、あっという間に寝てしまいました。

翌日、午前中はテレビゲームをしました。どんなゲームかとワクワクしていたら、日本でもやったことのあるゲームで驚きました。「楽しい?」「違うゲームがしたい?」と何度も聞いてくれて優しさを感じることができました。

ご両親はクロアチアの方で、昼食はクロアチア料理でした。ユーリアンが「いただきます」と日本語で挨拶をして、家族みんなと食べました。少しぎこちない言い方でしたが、知っている日本語を少しでも使おうとする姿がうれしかったです。たくさんの料理の中でも、大きな肉をトマトベースで味付けしたものが、とてもおいしかったです。

その日の午後は、美術館と教会に連れていってもらいました。美術館にはたくさんの個性的な絵があり、静かに観ているとすごく心が落ち着きました。

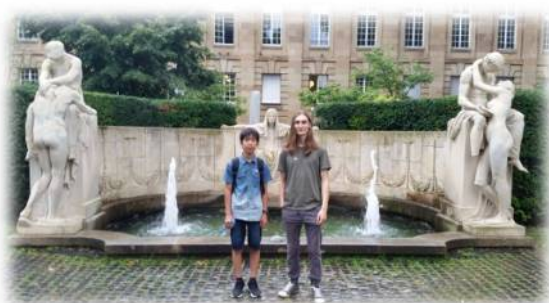
3日目、ヴィルヘルマ動物園へは電車で行きました。日本では見られない動物もありました。僕が写真を撮っている間も、ユーリアンは必ず待っていてくれて助かりました。日本と違って、ドイツは夜9時頃まで明るいので、動物園の後にショッピングモールへ行きました。シャープペンシルを買おうとしたら、「買ってあげるよ」と言ってプレゼントしてくれました。そのシャープペンシルは、僕のいつも使っている筆箱に大事に入っています。

最後の夜、たくさんのプレゼントをいただきました。おいしそうなお菓子がありました。その時、僕が初日に渡した日本からのお土産について質問をされました。なかなかうまく英語で説明出来なかったけれど、家族みんながうなずいて聞いてくれました。「扇子」はみんなが喜んでくれた、一番のお土産になり、うれしかったです。

不安でたまらなかった最初の気持ちは、もっとたくさんの時間を一緒に過ごしたい、という気持ちに変わっていました。それは、家族みんなが日本のことが好きで、どんな時も僕に優しく接してくれ、本当に楽しい時間を過ごしたからだと思います。お別れの時には、家族全員が車で学校まで来てくれ、一人ひとりハグをしてお別れしました。

この研修では、言葉が分からなくても、一生懸命に話すことで伝わるということを学びました。また、以前よりも積極的になれたのではないかと思います。

とても貴重な、かけがえのないこの経験を大切にしたい、何事にも一生懸命に取り組んでいきたいです。



優しいホストファミリー

大垣市立東中学校2年 松藤 羽南

ワクワクした気分でシュツットガルトの空港に到着しましたが、スーツケースが出てこなくて、明るい気持ちが途端に不安へと変わりました。これからあったこともない相手と話したりいろんなところへ行ったりするのに、着いた初日からすごく不安になったので「大丈夫だろうか」と思っていました。でもホストファミリーのお母さんがたくさん笑わせてくれたり、分からない私に一生懸命、身振り手振りで伝えてくれたりしたので落ち込んでばかりじゃいけないと思いました。買い物をして、家に向かっているときはすごく眠くて家の中を案内してもらったら、すぐに寝てしまいました。

私のホストファミリーは、お母さん、お姉さんのサラ、ホストフレンドのイサベルでした。イザベルのことはイザと呼んでいました。

その日と次の日はホストフレンドのイザが出かけていて会えませんでした。2日目はイザがいなかったで、他の子のホストファミリーと一緒に遊園地に行きました。遊園地には車で走りました。高速でも高速じゃなくてもとても速いスピードで走っていて楽しかったです。遊園地に着いたらすべてのジェットコースターを制覇し、空中ブランコやコーヒーカップにも乗って時間いっぱい楽しみました。そこにあった粒状のアイスは、色も可愛くてとてもおいしかったです。



3日目の朝、私が起きたときに隣の布団にイザがいてびっくりしました。でも、やっと会えてうれしかったです。この日は、ケーニギンシャルロッテ高校の見学をした後、ヴィルヘルマ動物園に行きました。昼食では食べ物のことがよくわからなかったで、イザに教えてもらいました。どこに何があるか、オススメは何かということを知り、ソーセージやマウルタッシェンなどのドイツらしいものを食べられました。少しずつイザとも話せるようになってきて、自分で考えていることが英語で伝わるのがとてもうれしかったです。

家に帰ってイザの部屋の本棚をみたらすごくたくさんの日本の漫画が並んでいてびっくりしました。イザが持っていた日本のアニメのポスターも見せてもらいました。私はアニメや漫画が大好きなのでこの日の夜はずっと目を輝かせていました。次の日にはスーツケースが届きました。お土産もたくさんあって、ひとつずつ説明して渡すことがで

きました。とても喜んでくれてうれしかったです。

ホームステイの最後の日、少しでも長くホストファミリーと一緒にいたかったので朝早く起きました。もうお別れだと思わずと少し寂しくなりました。バスの中では「さよなら」と「また来るね」という思いを込めて笑顔で手を振りました。

言語の違いという壁を越えて伝えたいことを誤解なく伝えたり、いろんな感情を共有したりすることが大切なのだと学びました。そして、そのために今後の英語の学習のしかたも見直していこうと思います。



ホームステイのホストとゲスト

名古屋国際中学校2年 渡部 明希

ホームステイは私がこの研修で一番楽しみにしていたことです。私の家族は今までに7回ほど、短期のホームステイの受け入れをしてきました。アメリカやフィリピン、香港の学生やベトナムの社会人など、いろいろな方と交流してきましたが、いつもホストとしてきちんと受け入れることができたか、少し心配な部分もありました。今回はゲストの側になってホームステイを経験することで、今後のホームステイの受け入れにも役立てたいと思っています。



今回私が受け入れてもらった家族は、ナタリーとお母さんとお父さんとお姉さんの四大家族です。私は日本からのお土産を箱に詰めて、プレゼントボックスのようにして渡しました。日本のお菓子の金平糖や日本一固いといわれる大垣せんべい、緑茶、和柄のせんす、浮世絵のうちわ、浴衣や下駄などをプレゼントしました。せんすやうちわは美しいとほめてくれました。特に浴衣はとっても喜んでくれました。ナタリーに浴衣の着付けをしてあげたときにナタリーとお母さんとお父さんもとっても喜んでくれて、たくさん写真を撮っていました。日本の文化をすごく気に入ってくれて、私もプレゼントを持ってきてよかったな、難しかったけど着付けてよかったなと思いました。



ドイツに着いた日の夜は、長時間のフライトで体調の良くなかった私に気を遣ってくれて、早く寝るように言ってくれました。そして、暑い日には水を持たせてくれ、帰りが遅くなる時はサンドイッチやフルーツを持たせてくれました。とても親切で優しくしてくれたけれど、リンゴは切らずに丸ごと入っていて、日本との違いも少し感じました。

懇親会の際、「私がビデオを作ったんだよ」とお母さんに言いました。そしたら「すごいね!」とほめてくれました。

頑張って作ってよかったな、とうれしくなりました。最後の日には、袋いっぱい詰めて、ドイツのお菓子やドイツのコスメ、お土産屋さんでのものなどたくさんいろいろなものをくれました。思いがけないプレゼントに驚きました。とてもうれしかったです。

初めてのホームステイですごく緊張していたけれど、温かいナタリーの家族に出会えたおかげでとても楽しく過ごすことができました。またいつでも来てねと言われたので、必ず会いに行きます!

今回のホームステイで学んだことは、ゲストはホストにただお世話をしてもらっただけでなくて、逆にゲストからホストに何かをしてあげて喜んでもらえることが、とても良い思い出になるということです。今度ホストファミリーとしてゲストを迎えるときは、今回の経験を生かして、自分たちの文化を伝えるだけでなく、相手の国の文化にももっと興味をもって、お互いのことをよりよく知り合えるようなホームステイを心がけたいと思います。



第2の故郷～ドイツ・シュツットガルト～

愛知淑徳中学校3年 柴田 理名

フランクフルト空港に着いてから周りの人は私には理解できないドイツ語で会話していて、これから大丈夫だろうかという不安がとても大きかったです。だから、シュツットガルト空港についてからホストファミリーと会うまでの時間、今までに感じたことのないような緊張をしていました。対面式の時にホストフレンドのピアが「Hi Rina!」と明るく言ってくれて少し緊張がほぐれました。でも、夕食の時にまったく知らない英単語を話されて、頭が真っ白になりうまく受け答えをすることができませんでした。

シュタイフ博物館では、館内は日本語の案内があり、とても安心しました。帰りの車の中でファザーが車のナンバープレートのことや、窓の外に見える景色のことなどいろいろ教えてくれました。すべてを理解するのは無理だったけれど、1つでも多くの単語を理解しようと頑張りました。

ホームステイ開始から3日目、ファザーの誕生日で、夕食はミニパーティーでした。マザーを手伝って初めてピザを生地から作りました。いろいろなドイツらしい料理を食べることができ、とても美味しかったです。たくさんの人が家に来ましたが、会話に積極的に参加できるようになり、とても楽しい時間でした。夕食の後、テレビ塔に行ってシュツットガルトの夜景を見ることができました。この日の日の入りの時刻は21時17分で、日本ではありえない時間です。ドイツでは、遅い時間まで日があって羨ましいと思いました。



dmというドイツの薬局では、レジが日本と違って、かごから商品を出したり、商品を袋に入れたりするのがすべてセルフで、私はたくさん買い物をしていたので大変でした。この日の夕食は、お土産で持ってきたお箸を使ってみんなで食べました。マザーとファザーが食べるのにすごく苦戦していましたが、日本の文化を理解しようと頑張ってくれてうれしかったです。

6日目、ついにお別れの時がやってきました。絶対泣かないと心に決めていたのに、別れ際にホストとハグしたら自然と涙があふれました。短い期間でしたが、ホス



トファミリーと過ごした時間は、私の宝物です。

ドイツへ来て初めは、意味の分からない言語や、食文化の違いなどから、早く日本に帰りたいという不安で泣いてしまうこともありましたが、その不安を乗り越えることができました。この7日間は私の中でとても充実していて、人生のターニングポイントとなりました。これからは、なんにでも恐れずにチャレンジしていきたいです。将来今よりも成長した姿で、ピアやファミリーの皆と再会したいです。

そして、今回研修に参加させてくれた家族、不安な時に支えてくれた団員のみんなや先生方に感謝します。





研修のまとめ



ドイツと日本の違い

名古屋国際中学校2年 渡部 明希

待ちに待った出発のとき、期待と不安を胸に家族のもとを離れドイツへと旅立ちました。中部国際空港からフランクフルト空港までの12時間のフライトは、長いようで短く感じました。シュツットガルト空港に着くとロストバゲージが起こってしまいました。初日からトラブルが起こり不安な思いでホストファミリーと対面しました。しかし、ホストファミリーは優しい方々ばかりで、私たちの不安もかき消され、安心してドイツでのホームステイをスタートすることができました。



研修2日目はみんなで学校見学のあと動物園に行きました。話すことや理解することのできないドイツ語に囲まれて、英語で頑張って話しても理解してもらえないことも何度かあり、言語の壁を感じました。でも、お手玉を使ってホストフレンドの名前を覚えるという交流で、自分のホストフレンドではない人とも仲良くなることができました。動物園では、さまざまな動物を見ました。日本の動物園よりも大きく、植物園や水族館のコーナーもありました。お昼ご飯には、マウルタッシェンやソーセージ、ポテトなどのドイツ料理を食べました。とてもおいしかったけれど、ちょっと味が濃いようにも思いました。解散した後も他のホストフレンドたちと行動することが多かったので、研修の時間以外でも交流を深めることができました。



研修3日目はノイシュバンシュタイン城へ行きました。お城へ向かうバスの中で「switch」を持ってきているホストフレンドがいました。みんなで「switch」で遊びました。さすがは世界の任天堂、そのおかげで仲良くできたし、英語による説明を聞き取るという経験もできました。ノイシュバンシュタイン城の音声案内を聞きながら、日本とは全然違うお城のつくりを見学しました。その日は解散が遅かったのですが、話を聞いていた通り日照時間が長くて驚きました。

研修4日目は教会で礼拝を見学しました。私は初めて礼拝に行きました。ホストフレンドに説明してもらいながら、子どもたちによる讃美歌を聞いたりみんなで歌を歌ったりしました。ドイツ語の歌はかなり難しかったです。そのあとケーニギン・シャルロッテ高校の終業式を見学しました。学生がバラバラに並んでいたり、歓声を上げていたり、日本とは違って自由な感じがしました。その日の夜の懇親会では、日本で用意した大垣や日本の文化の紹介をしました。みんなの練習や努力のおかげで多くの人に喜んでもらうことができました。

今回の研修で、私は、外国の人とコミュニケーションをすることの難しさ、逆に、それができたときの喜びを感じることができました。また、食事や建物や学校の雰囲気など、日本とドイツで大きく違うところに気づくとともに、「switch」のように、今や世界中の多くの人たちが同じ文化を共有していることにも気づきました。

この研修で素晴らしい経験をし、たくさんの思い出をつくることができました。国際交流協会の方々、引率の先生方、本当にありがとうございました。

つながる交流に思いをはせて

公益財団法人大垣国際交流協会 熊谷 康宏

今から30年前の1988年10月、大垣市とシュツットガルト市はフレンドリーシティとしての交流を始めました。その翌年の1989年に「平成」へと改元しましたが、来年2019年をもってさらに新しい年号に改元することになっています。そういった意味で、まさに今回の派遣は、「平成」の間に培われた両市の交流の集大成となる事業であったといえます。そんな記念すべき回の引率者を仰せつかったことは非常に名誉な、身に余ることであったと感じております。

また、今回を最後に、長年にわたり大垣市とシュツットガルト市の交流を献身的に行ってみえた、ケーニギン・シャルロッテ高校（シュツットガルト市）の教諭であるクラウディア・ベックダイム先生が勇退されることになりました。派遣期間中にベックダイム先生のご自宅をお訪ねする機会がありましたが、そこでは日本に由来する数々の品物を拝見することができました。ベックダイム先生の、日本や日本文化への関心・情熱を垣間見ることができました。そうした熱意を持つ彼女がいればこそ、ここ10年の交流事業が非常に質の高いものになったのだと、感謝の念に堪えません。



また、シュツットガルト滞在の最後の夜には懇親会を開いていただきましたが、そこでの「再会」も交流の長さを感じさせるものでした。

両市の交流が始まった当初に、円滑な交流のためにご尽力をいただいたマンフレット・エーリンガーさん、そして、相互交流で大垣にみえたこともある元ケーニギン・シャルロッテ高校副校長のハンスベルト・ベルチェさんにご参加いただけたのです。お二人からは、当協会設立30周年に寄せてのコメントをいただくことができました。ご高齢のお二人はすでに交流の現場から退かれて久しいのですが、今回は節目の大切な機会であると、わざわざ交流会にご参加いただけたとのことでした。ご挨拶させていただくと、お二人とも昔の交流の様子を「楽しかった」「懐かしい」という思いがあふれる表情でお話されてみえました。当然、私自身は当時の関りはありませんが、その様子を拝見していて、まるでお二人が昔からよく存じ上げているおじい様であるかのように感じたものです。

お二人をはじめとして、交流のいろいろなタイミングで、過去の大垣との交流に関わりのあった引率の先生や団員にお会いする事ができました。折に触れてわざわざ大垣からの訪問団に会いに来ていただけたという事実が、皆様がこの交流に特別な思いを寄せていただいているということの証であると感じられ、とてもうれしく感じました。

私自身は過去の交流とのつながりに焦点をあてて寄稿させていただきましたが、今回の派遣自体も、たくさんの絆が生まれた実り多いプログラムであったことは、派遣団員たちが報告してくれた通りです。日本とドイツ、大垣とシュツットガルトの間にあるつながりを実感として持っている人がこうして増えていくことで、今後の交流を紡ぐ力もまた増えていくと思います。そうして紡がれた交流が、これからもずっと、新しい絆を、笑顔を生み出してくれることを願っています。





【第12回大垣市中学生ドイツ・シュツットガルト市研修派遣】

事業主体／公益財団法人 大垣国際交流協会

※大垣市国際化関連事業補助金対象事業

＜派遣報告書＞（平成30年11月）

編集／公益財団法人 大垣国際交流協会

〒503-0911

大垣市室本町5丁目51番地 スイトピアセンター学習館2階

TEL 0584-82-2311

FAX 0584-82-2314

URL <http://www.i-oiea.jp/>

Eメール oiea@mb.ginet.or.jp

